

Title	L. M. Regis, O. P.; EPISTEMOLOGY
Sub Title	L. M. Regis, O. P.; EPISTEMOLOGY, (Translated by I. Ch. Byrne) The Macmillan Company, New York, 1959, pp. 549
Author	有働, 勤吉(Udo, Kinkichi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1963
Jtitle	哲學 No.43 (1963. 1) ,p.255- 258
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000043-0255

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書 評

L. M. Régis, O. P.; EPISTEMOLOGY,
(Translated by I. Ch. Byrne)

The Macmillan Company, New York, 1959, pp. 549

有 働 勤 吉

本書は V. J. Bourke その他の編集による Christian Wisdom Series の一巻として出版されたもので、4部12章からなっており、著者がこれまでに発表した論文や講演録をもとに、認識論とはなにかについての体系的労作を収録している。

「認識論的問題」という第1部で、著者は認識論的問題の本質を明らかにするために、「問題」一般についてのべ、それが精神における二人の対立した話者のかつとうによつてひき起されるという「問題」の支配法則を明らかにする。つぎに問題の発生とその心理的反応の構造という視点から、認識論をはじめて形式的に提起したと信じられているデカルトにおける問題、カント的問題の本質を明らかにしながら、デカルトから今日に至る300年の認識論史を展望している。ところで認識論的問題もそれが問題であるかぎり、アリストテレス・トマスの経験論的方法に基づく哲学的問いの4つの段階、(1)—があるかどうか(2)—はなんであるか(3)—はいかにあるか(4)—なぜそうあるのか、に対応したものでなければならない。デカルトが認識論の嫡子であることは確かなことだとしても、彼にはじまる近代認識論が「いかにして不可謬の真理の認識は可能であるか」という最後に問われるべき問題から出発した点に300年の認識論史に混乱だけを与え、哲学的認識論を不可能にした禍根がある。著者はアリストテレス・トマスの哲学的方法をたかく評価し、不可逆的な哲学的問いの4段階の認識論的問題への適用を示しながら2部以下の哲学的認識論を準備する。

哲学的問いを認識論的問題に適用する場合、認識があることは自明であり、認識なしには問いそのものも不可能であるから、認識論の第一の課題は認識の本性はなにかと問うことであり、第二部の「認識とはなにを意味するか」はこの研究に捧げられている。

過去300年間、西欧思想は認識の意味を統一するのに腐心し、この統一を達成す

るためによりラディカルな方法を採用してきた。デカルトにおける数学的認識によるすべての認識の演習、カントの物理学的認識による認識の基礎づけ、数学的判断に基づく判断作用だけに認識という語の使用を限定したブランシュヴィックはそのよい例証である。認識という語に絶対的一義性を要求する近代精神と対照的に思い合わされるのは、認識の意味を統一するために認識のタイプの多様性をみとめ、認識の質料的対象と形相的对象、認識の類比説を発明した、古代哲学者の融通性と人間的方法である。

哲学が物理的世界をまげずに、客観的に認識することにあるように、哲学的認識論も認識の世界をあるがままに受け入れ、それによつて計られるのでなければならぬ。したがつて認識論の唯一の出発点は「身体と結合した精神の認識とはなにか」ということでなければならない。認識をその全体像において把握する積極的なアプローチによつて、認識が内在性をたもちながら外的実在を「把捉」とするという認識の逆説的な二側面が調和的に説明され、また人間認識の多様性も、感覚し思惟する人間の本性的統一性から現象する動的な偶性として統一的に理解されるのである。そしてこのためにデカルトによつて正当な地位から引きずり下ろされた感覚的認識の果たす役割を強調すると共に、能動知性、抽象、可知的形相の問題が論じられる。

「真理認識とはなにを意味するか」という表題の第三部では、認識の最も基本的な作用、すなわち外的実在の内在化としての「把捉」を補完する「判断」の問題が扱われている。もし「把捉」が実在の側面を一つ一つ内在化することによつて遂行されるとすれば、この継起的把捉は「想像」に依存し、可知的形相を継起的にしかわれわれに与え得ない能動知性の不完全さからきている。しかしこの不完全さにもかかわらず、知性は断片的把捉を総合する能力をもっている。これが判断と呼ばれるものである。しかし判断が断片的把捉を補完するといつても、判断自身が「把捉」の能力をこえている実在の側面を把握する訳ではなく、「把捉」の所産である既知の概念を使つてのよりよき認識である点が注目されなければならない。そしてこの既知の判明な概念の認識が真理認識の意味であり、したがつて真理認識は純粹に精神内在的である。つまり判断は丁度「把捉」によつて認識が真理を所有するかのよう「把捉」を完成する訳である。そこで真理の認識とはなにかと問うことは、不可避免的に不完全な「把捉」を真理認識という完成された状態にたかめるのはどのような要素か、と問うことにほかならない。

ところで人間認識において真理があることは確実であり、真理があるかどうか自体を問題とすることはデカルトの例において明らかなように哲学の死を意味するから、ここではもつぱら真理の事実の発生をめぐつて、判断がつぎの三つの側面から分析されている。第一に精神内在的である真理の主観的原因から、つぎに判断が結合という仕方で発出する知性の作用としての側面から、そして最後に命題と呼ばれ

る判断作用の内在的目的の側面からそれぞれ分析される。

ギリシャの昔から現代まで哲学者が解決に心を砕いてきた問題の一つに真理認識の多様性とそれらをどう秩序づけるかという問題がある。真理の価値の評価が不可謬的におこなわれうる公算はなにかという、完璧で厳密な哲学的認識論ならけつして避けることのできない認識論の最後の問題に取り組んでいるのが第4部「不可謬的真理の認識とはなにか」である。著者はアリストテレス・トマス流の哲学的設問の順序にしたがつて、これまで認識の事実から出発してその本質 (*quid est*) を明らかにし、それを前提した上で真理の特質 (*quia est*) を考察してきた訳であるが、デカルト・カントが認識論の出発点と考えた不可謬的真理の認識の問題 (*propter quid*) は、上に述べた手続きを経てのち、はじめて問いうる種類の問題であるとして、認識論的問いの不可逆性が重ねて強調される。最後の部における著者の関心は問題の性質上、その認識に反省的な性格が要求される形相的真理をめぐる諸問題にある。そこで問題は不可謬的真理を対象とする「同意」(*assensus*) あるいは価値判断の本性とその認識論的特質はなにかということであり、派生的な認識の自明性しかもたない理性の間接的真理は、分析と総合によつて発見され、不可謬的真理である自体的な存在の自明性の「同意」によつてその確実性と価値が保証されるという問題が扱かれている。

著者は結論においてトマスの認識論の方法に触れ、その英知的性格を指摘する。認識はそれが獲得される時間的順序からすれば、われわれにとつて最もよく知られたものから出発して、自体的に最もよく知られうるものへと進む。このわれわれにとつてより自明的な感覚的結果から出発する論証は、継起的な真理の発見において成立するタイプの知識であり、推理的知識 (*rationalis consideratio*) である。これに対して完結された真理が知性に与えられるような発見された真理を判断する知識のタイプがあり、これは完結的知識、学的知識 (*intellectualis consideratio*) と云われる。完結された認識では論証の順序とは反対に、結果の認識はつねに原因あるいは構成要素の認識に依存している。推理的知識は自己の出発点である感覚的結果を説明することができず、発見された真理の判断である完結的知識によつて与えられるしかない。上に述べた推理的知識としての理性 (*ratio*) と完結的知識としての英知 (*sapientia*) の区別から、推理が英知に依存することは明らかであり、英知は推理の出発点を判断するばかりでなく、同じ推理の結論に同意と確実性を与えることによつて、推理の原理であると同時に目的であると云えよう。デカルト・カントは推理的知識である数学や物理学によつて完結的知識としての哲学を基礎づけようとしたが、その結果はカントにおいて特に明らかなように英知を死に追いやり、その「批判」の正当性さえも確証することができなかつた。認識論は人間と世界を英知的に観想する形而上学の一つの所産として、形而上学によつて出発点と到達点が

与えられることによつてのみ、自己の安定性を確實なものにできるのである。

以上は本書の素描である。形而上学が認識論の α であり ω であるという基調に立つて展開される著者の認識観は、認識論が第一哲学であるとする近代の意識論的認識論に対する存在論的認識論の体系化の一つの試みと言うことができよう。豊富な文献的知識を駆使して近代認識論を論難する著者の態度には、ネオトミストの多くに見られるような観念論に対してトマス認識論を弁護するといった消極さに代つて、意識論的認識論の思想的責任を追求する気構えが覗われ、この点でぼう大な註と共に、類書の水準をはるかに抜いている。しかし疑問は残る。もし著者が主張するように、形而上学が推理的知としての認識論の出発点であり、到達点であるとすれば、そこでは形而上学は判断による一切の経験的検証から超絶したもの、すなわち先験的なものとして措定されている。これは経験的実在論として定礎されたアリストテレスの形而上学をプラトンの先験的・観念的なそれに逆転することを意味しないだろうか。またデカルトの「方法的懐疑」やカントの「批判」に代表される近代認識論の新発見と云われるものは、アリストテレス・トマスに既存の認識論の焼きなおしであり、その公式的表明にすぎないという著者の断定にはたぶんに議論の余地があろう。近代および現代の古代・中世に対する無知がこのような断定を生むほどに甚だしいという点では異論はないが、デカルトやカントといった近代認識論の旗手たちが、古代・中世の哲学的盲点をついた事実は、かれらがその盲点をつくことをもつて哲学のすべてと考へた誤りとは別に、卒直に認めるべきであり、この辺に古代・中世研究者が自戒すべき点があるように思われる。